アメニティータウンの育成にかかわる住民意識の分析

岩手大学　正会員　安藤　昭
岩手大学　正会員　赤谷　隆一
岩手大学　○学生員　高橋　英樹

1. はじめに

快適なまちづくりを進めるためには、住民の積極的参加のもとに行うことが大切である。そのためには地域住民が、自ら所属するコミュニティーに対してどのように評価しているか、さらにはコミュニティーの質と住民の参加態度の関係をあきらかにすることが望ましい。ここでは、以上のような考えに基づいて、自分の所属するコミュニティーに対する評価、市民のまちづくりに対する参加意向、およびこれら2つの関係をあきらかにすることを目的とする。

2. 調査概要

(1) 調査地域および被験者

調査地域は、盛岡市内の代表的な8地区（新興住宅地として、松園地区、箱清水地区の2地区、旧住宅地区として、加賀野地区、郡部として太田地区、商業地区として、材木町、肴町、南大通り、大通りの4地区）を選び、被験者は、これらの地区内に在住する成人男女において、ランダムサンプリングによって選定された387人について調査を行った。

(2) 調査の内容および調査の方法

調査項目は、①まちづくりへの参加経験、②まちづくりへの参加意向、③まちづくりの参加項目についての重要度の評価、④住民意識の分析枠組による意識類型の分析、以上の4項目である。ここで④における住民意識の分析枠組について説明を行う。地域社会意識の分析枠組として、「特殊的(個別的)―普遍的」価値意識と、「主体的―客観的」行動体系の2本の軸を設定し、4つの住民意識モデルに分けるという分析枠組を用いた。[1] (図-1) 意識類型を出す方法としては、以下の2つの質問によって、4つの選択肢[2]のどれをえらぶかで決定するという形をとった。

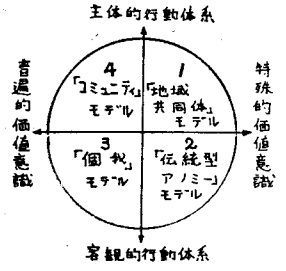

図-1 地域社会の分析枠組

A「あなたの住んでいる地域では、どの考え方の住民がいちばん多いとお感じになりますか。」 B「あなたの考えに最も近いものはどれですか。」

調査方法は、留め置き調査法で行い、期間は、昭和59年12月10日～20日、回収結果は、有効回収数(率) 242人(62.5%)であった。

3. 集計、解析結果および考察

(1) 住居地区、商業地区別

参加経験においては、地区別の違いは表われなかったが、具体的な参加項目および参加項目における重要度の評価(一対比較法)において、かなり違いが見られる。(図-2、図-3左)。まず項目①の「定期的に地域の環境整備(清掃や空カン・空ビン集収など)を行った」が、住居地区において60.8%であるのに対し、商業地区では35.2%、②「ブロック塀を生垣などに換えたり、バランダを草花で飾ったりして地域の緑化を図った」が、住居地区20.8%、商業地区6.6%といづれも住居地区の参加度が、2～3倍高い。しかし⑤「まちの特性にふさわしい良好な環境とするため住民の発意によるまちづくりの計画策定(地区計画、建築協定、緑化協定など)に参加した」が、住居地区4.2%、商業地区24.6%、⑧「市街地整備(土地区画整理、市街地再会発など)の公共事業に協力した」が、住居地区3.3%、商業地区18.0%と商業地区が5～6倍高い参加度を示している。また、参加項目における重要度の評価についても同様の傾向が見られる。次に「あなたは今後、住んでいる地域のまちづくりについて、どの程度参加したいと思いますか」という参加意向においては、商業地区のほうが高い積極性を示している。(図-3中)　意識類型による分析では、住居地区がA(あなたの住んでいる地域では?) 1位「コミュ

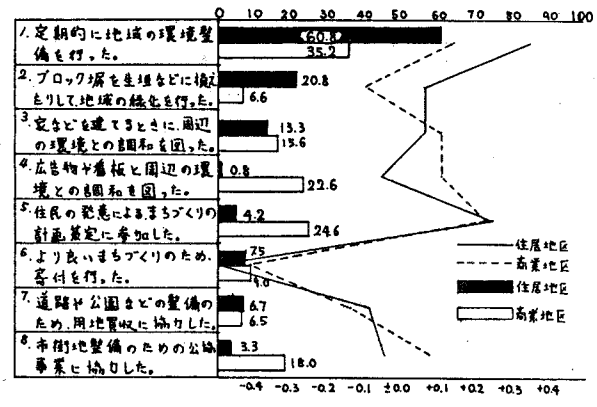

図-2 まちづくりへの参加経験および重要度

ニティー」モデル　2位「個我」モデル　3位「地域共同体モデル　4位「伝統型アノミー」モデル　B(あなたの考えは?)　1位「コミュニティー」モデル　2位「地域共同体」モデル……と、A.B間に違いが生じているのに対し、商業地区では、A.Bとも1位「コミュニティ」モデル　2位「地域共同体」モデル……とすべて一致していることがわかる。(図-3右)

(2)　新興住宅地(松園、箱清水地区)、その他の住居地区(加賀野、太田地区)(図-4)

新興住宅地が参加経験で高い割合を示しているとともに、参加意向においても高い積極性を示している。また意識類型については、新興住宅地のAB間のずれに比べ、他の住居地区のずれが大きいことがわかる。

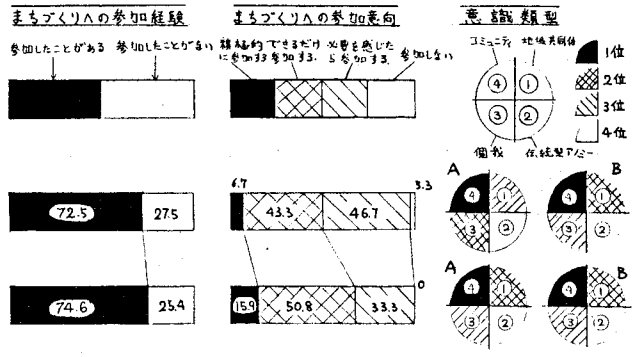

図-3　住居地区、商業地区別集計結果

(3)　参加意向別　　(図-5)

「あなたは今後、住んでいる地域のまちづくりについてどの程度参加したいと思いますか」という設問に対して、「積極的に参加する」、「できるだけ参加する」と高い積極性を示している住民と、「必要を感じたら参加する」、「参加しない」と消極的な参加意向を示している住民の間では、まちづくりへの参加経験において、かなり違いが見られ、また、意識類型において、積極性を示している住民では、A.Bが一致しているのに対し、消極性を示している住民では、A.B間にずれが生じている。

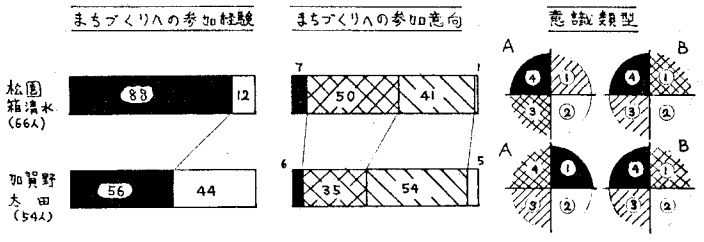

図-4　新興住宅地、他の住居地区別集計結果

(4)　意識類型別　　(図-6)

図-1と図-6を照らし合わせると、モデルごとの特性がよく表われている。たとえば「普遍的価値意識ー主体的行動体系」で表わされる「コミュニティー」モデルでは、参加経験、参加意向がともに高く、「普遍的価値意識ー審美的行動体系」である「個我」モデルにおいては、参加経験はやや少ないが、参加意向は積極的である。また「主体的行動体系ー特殊的価値意識」である「地域共同体」モデルでは、参加経験は多いが、参加意向は消極的である。　同じ見方をすれば、「伝統型アノミー」モデルが、参加経験、参加意向がともに低いという結果になっている。

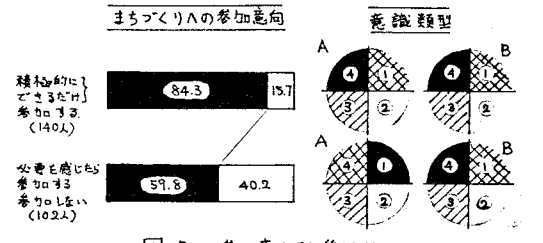

図-5　参加意向別集計結果

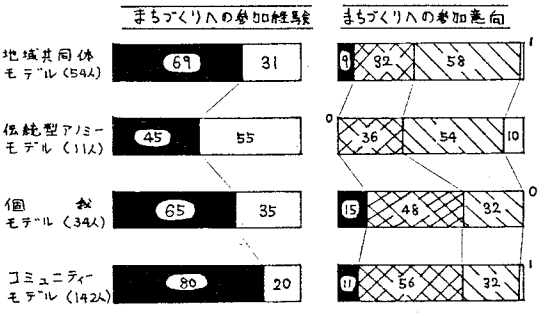

図-6　意識類型別集計結果

4. まとめ

以上の結果から、A「あなたの住んでいる地域では、どの考え方の住民がいちばん多いとお感じになりますか」とB「あなたの考えに最も近いのはどれですか」という2つの設問を設けることによって、地域住民のまちづくりへの参加程度および参加意向を、さきの住民意識の分析モデルで説明できるということがわかった。

参考文献　1)「住民意識調査とその問題点」　松原、治郎　土木計画学講習会テキスト

2)「魅力あるまちづくりと住民参加に関する世論調査」　総理府　昭和59年11月